

論文

レスリー・エプスタインの『ユダヤ人の王』 ——ゲッターに生きて

佐川 和茂

キーワード

閉鎖型ゲッター
分割して統治
連帯責任
移送の選別
危機的状況をプラスに転化
地獄での笑い
若者のやりくり上手
歴史の幅広い視点

目次

はじめに
1 ゲッターとは
2 ユダヤ人評議会の役割とは
3 評議会議長の清濁併せ呑む性格
4 独特のユーモア
5 若者を中心とした抵抗組織
6 戦うユダヤ人のイメージ
結論

はじめに

1918年頃より第二次大戦後までの激動期を背景とするレスリー・エプスタイン (Leslie Epstein) の『ユダヤ人の王』(*King of the Jews* 1979年)は、10章とエピローグで構成され、時折読者に問いかける回想形式をとる。この作品は、ゲットーでのユダヤ人評議会の役割、評議会議長の清濁併せ呑む性格、極限状況に直面した人々の奮闘やそこで発揮される独特のユーモア、若者を中心とした抵抗組織の活動、そして戦うユダヤ人のイメージを描くことによって、ホロコースト文学における特徴を示しているのではないか。本論においては、これらの特徴を探りつつ、さらに以下を問う。ゲットーの生活とは、いかなる状況であったのか。そこで人々は生き延びるためにいかなる奮闘をしたのか。そして、彼らの歴史よりわれわれは何を学べるのか。

1 ゲットーとは

1179年のキリスト教公会議(第三次ラテラン会議)における「キリスト教徒とユダヤ教徒の混住を禁じる」という決定は、差別と迫害の歴史を生きてきたユダヤ人をさらに苦しめる要因となった。最初は周囲を壁で囲まれた閉鎖型ゲットーではなかったが、その決定は次第にユダヤ人の居住環境を狭め、その中で彼らはユダヤ人を象徴するバッジの着用を強制され、手仕事や行商など職業を限定されていった。「ゲットーは、ゲット(鑄造場)に由来するといわれ、大砲鑄造場の傍らにゲット・ヌエボ(鑄造新地区)として作られたことから、その名が生まれたという」(『ユダヤを知る事典』96頁)。

『ゲットー ユダヤ人と疎外社会』によれば、「ゲットーは、ユダヤ人の最初の入植地が位置していたヴェネツィアのある区域に、その起源を持つものと考えられ」(3頁)、「ゲットーの歴史は、概ね、離散以降のユダヤ民族の歴史である」(5頁)という。また、『旧プラハの少年』において、16世紀プラハのゲットーは、高い壁で囲まれ、三重になったゲットーの門は昼夜監視され、建て込んだユダヤ人の家には幾重にも鍵が掛けられていた。ユダヤ人たちは不意の襲撃に備え、ゲットー内の家屋に秘密の扉や、壁の中に秘密の通路を準備していたのである。そして、『ゲットーに生きて』は、17世紀のユダヤ人が日常生活をこまごまと綴った回想録であるが、その中で、ゲットーでのユダヤ人の生き方、神への信仰、商取引、辛抱強さなどが語られてゆく。

こうしたゲットーの歴史を辿る中で、本論で焦点を合わせてゆく場所は、第二次大戦中、ヒトラー、ナチスによってポーランドをはじめとしたヨーロッパ諸国に作られた閉鎖型ゲットーである。『ホロコースト百科事典』によれば、「ゲットーは絶滅収容所へ移送する前にユダヤ人を封じ込めた場所」(579頁)であり、「武器を用いずユダヤ人を餓死・病死させる場所」(581頁)であり、そこでは「ゲットーの撤去とユダヤ人問題の最終的な解決とが同時進行していったのである」(582頁)。

『ユダヤ人の王』でゲットーはいかに描かれているのか。まず、ナチスは、ユダヤ人とポーランド人、ゲットー住民と難民、差別化された作業所、女子供、ユダヤ人警察との間で互いを反目させ、彼らを分割して統治しようとした。その段階で、占領軍は連帯責任という原則をあらゆる段階で実際に適用し、どんな抵抗行為でも共同体全体がその償いをさせられるであろうという恐怖を植えつけた。

ナチスの方針は、占領下の全住民に恐怖を与え、それによって一握りの人材で彼らを動かせるようにすることであった。

『ユダヤ人の王』ではポーランドの町の貧しい労働者居住地域にゲットーが設置されるが、そこで周辺に住む全てのユダヤ人は舗装もなく泥だらけの道が入り組む環境へと追いやられてゆく。ちなみに、『ヒロシマ』の著者ジョン・ハーシーの『壁』にもあわただしいゲットーへの引っ越し状況が詳述されているが、老若男女・病人・ベトナムも含めて短時間（72時間以内）にゲットーへ移動させられたことは、いかに大変であったか。当然、限られた時間で全ての所持品を運べるわけではないから、あとに残された家屋・財産はキリスト教徒に没収されてゆく。以前はゲットーの区域外で生計を立てていた多くのユダヤ人は、今やその道を絶たれ、乞食に零落した人々がおびただしい数に上り、自殺者も続出した。

閉鎖型ゲットーは高い壁と鉄条網で囲まれ、その中に閉ざされた人々は誰もゲットーを離れることを許されない。実際、離れただけで死の極刑が待っていた。これは、まったく前代未聞のことではないか。

ゲットー内のほとんどの家は木造であり、火事に対して防備が弱い。ユダヤ人たちは、凍土をたたけばシャベルが折れ、室内の水が夜明けまでに凍ってしまうようなポーランドの厳冬を、燃料が不足しているために、家具や床板まではがして燃やしながら過ごさねばならない。そうした折、作品の第3章において、妻に貴重な書籍を燃やされ狂気に駆られた教授の部屋から出火するが、水が凍って消火が思うに任せない。

また、ゲットーではシナゴークの存続が許されていない。ゲットー外部のアーリア人地区に残された4軒のシナゴークも全て占領軍によって焼かれてしまう。一軒だけキリスト教教会が封鎖された地域に残されているが、ゲットーには、ユダヤ教徒とともに受洗ユダヤ人も押し込められているのである。

さらにゲットーには下水設備がないために馬車で家々を回って污水を集めるが、その信じがたい混雑、不潔、住民の著しい栄養不足など、人々が疫病に倒れる悪条件がそろっている。外国との連絡はすべて絶たれ、彼らは強制労働に駆り出され、きわめて乏しい配給食糧で暮らさざるを得ないが、狂ってしまうような飢えが日々深刻になり、人々はあばら骨が見えるほどにやせている。飢餓やチフスによって毎日何百人もが死んでおり、個々の埋葬が不可能となってゆく。そこでは、ほとんどの住民が愛する人を失っており、常に誰かが狂気に駆られて叫んでいる。

こうした多くの悲劇の中で孤児が増加してゆくが、孤児院に入りきれない子供たちは、地面に穴を掘って寝る状況に陥り、そこで子供の凍死はどこにでも見られる現象になってしまう。

混沌・無秩序・不条理が常態化したゲットーでは、占領軍の軍服を作る工場を準備し、労働によって終戦に至るまでかろうじて生き延びることを目指す。病院や刑務所より集められた寝具が教会へと運ばれ、そこで枕やマットレスを切り裂いて羽毛を取り出し、それを工場で防寒用軍服の製造に利用しようとするのである。しかし、差別化された作業所では個々の従業員に厳しい仕事のノルマが課せられており、それを達成しなければ粗末な食事にすらありつけない。

生きる権利があるのはドイツ軍に軍需品を補給するために働く者のみというしだいであるから、これは悲劇的なパラドックスとしか言いようがない。全身全霊を持ってドイツを憎悪しながら、かえって敵の勝利に手を貸すという代価を支払うことでしか自らの命を賄えないとは。しかもドイツの勝利はユダヤ人を全ヨーロッパの地表から完全に消し去ることをまさに意味していたのである。

そこで、労働者は、自分たちなりにサボタージュをしようと願い、軍服を仕立てる際、両足を縫い合わせてしまったり、ボタンをわざと不ぞろいにつけたり、その他いろいろのささやかな抵抗を試みる。

こうした中、ゲットーの極悪環境においても教育が継続されていたことに注目したい。子供たちの学校を開くことは禁止されていたが、タルムード学習を含めてあらゆる段階の秘密の学校が広汎に存在していた。そこでは孤児たちを含めてゲットーの不遇な状況でも勉強に励んでいる人々が存在した。また、最後まで上演を続けていた劇場もあった。ゲットーにおける文化的欲求はきわめて強かったのである。誰もかれもが、戦後の移住に備えて英語を一生懸命に勉強していたともいう。

また、差別と迫害の歴史を生きてきたユダヤ人に顕著であった相互扶助の体制は、ゲットーにおいても可能な限り存続・機能していた。スープ給食所、共同炊事、コーヒーを沸かすための共有ポットが活用され、ゲットーのために食料を育てる試みさえもあった。野菜がバルコニーや、屋根の上でさえ栽培されていたのだ。火事で焼け出された人々には、居住委員会の世話で新しい部屋が用意された。なお、ゲットーでの出産は固く禁じられていたが、そこでは秘密の地下出産所が存在していた。

こうした住民の必死の努力にもかかわらず、実は、占領軍にとってゲットーの有用性など、どうでもよかったのである。ナチスは、ゲットー住民の労働力を搾り取りつつ、飢餓やチフスによっても彼らの死亡率が不十分であると見るや、子供・女性・老人・病人を含めて彼らを家畜用貨車に詰め込み、絶滅収容所に移送して大量虐殺する方針へと転換してゆくのである。

『ユダヤ人の王』や、歴史学者エマヌエル・リングエルブルムによって大戦中につづられた『ワルシャワ・ゲットー 捕囚 1940 - 42 のノート』や、さらに多くのホロコーストの日記などを含めて、ユダヤ人たちは彼らのこうむった体験を記録し記憶しようとした。残されたわれわれは彼らの記録より何を学べるであろうか。それはひとつには、逆境を生き抜く意志、極限状況を生き延びようとする意志であろう。

2 ユダヤ人評議会の役割とは

近代に至るまでユダヤ人評議會は自治的な自己管理機関であり、東欧のユダヤ人各共同体によって、ユダヤ人の宗教生活における地域的権威として受け入れられてきた。

ところが、ナチス支配下のゲットーでは、占領軍の強制によってユダヤ人評議會が作られ、その役割は、占領軍の無理無体な意向を受け、ゲットーへのあわただしい移動をまかない、ユダヤ人同胞より不合理な税を徴収し、ナチスの意向に奉仕するユダヤ人警察を統括し、全ての宗教組織や文化行事や、慈善制度を運営することであった。さらに、労働可能な住民のリストを作成し、ゲットーの労働者にドイツ国防軍のための製品を仕上げさせる作業所を組織し、最終的には死の収容所に移送するユ

ユダヤ人を選別することすら強制されたのである。ナチスはユダヤ人評議会に恐るべき犯罪の片棒を担がせようとしたのだ。それは極悪非道を達成するためのナチスの目論見である。ナチスが占領地域のいたるところで取った方法は、ユダヤ人の苦難の要因である差別的法令を、ユダヤ人自身に施行させるというやり方であった。前述したように、ユダヤ人同士を互いに反目させ、彼らを分割して統治し、ユダヤ人評議会メンバーにはナチスの命令を実行するよう仕向け、仮に命令を拒否すれば、さらに多くのゲットー住民を収容所に移送したのである。また、仮にユダヤ人評議会の委員が良心の呵責に耐え切れず自殺を図ったとしても、すぐに代わりの者が任命された。ユダヤ人評議会メンバーが直面した道徳上の試練はいかに大きかったことか。

ただし、その反面、ユダヤ人評議会の腐敗振りにも顕著なものがあったという。たとえば、ほとんどの場合、ユダヤ人警察は理解を絶する残忍さを示し、同胞を家畜用貨車へと護送する際、殴打や怒号を繰り返した。その中でユダヤ人警察の署長は腹黒く立ち回り、危険を冒して外部より食べ物を密輸する人々より受け取る賄賂で、たっぷりと私腹を肥やしていた。しかし、ゲットーの解体時には、占領軍にとってもはや不要となったユダヤ人警察官は、その家族とともに死の収容所へと移送されてゆくのである。

さて、『ユダヤ人の王』第2章において、子供時代にユダヤ人と親しく交わったポーランド人が、占領軍の威光を受けてポーランド側の筆頭にのし上がり、ゲットーに残されたカフェの主人にユダヤ人評議会議長となるよう命じ、さらに評議会メンバー15名を居合わせた客の中から選ぶよう命令するのである。そこで、占領軍に勝手気ままに牛耳られるより、ユダヤ人評議会でも可能な物事を管理したほうがよいという意見が出て、大騒動の末、共同体の有力者たちがメンバーに選ばれるが、彼らは占領軍によって全裸にされ、互いの背中を蛙飛びさせられ辱められた挙句、射殺されてしまう。占領軍は、有力者を先ず抹殺し、ユダヤ共同体の指導力や抵抗力を奪おうとしたのである。大物で構成された最初のメンバーが虐殺された後、カフェのウェ이터や音楽隊の隊員などによってユダヤ人評議会が構成されてゆく。こうしたメンバーはそれぞれが独立した事務所を構え、大勢の同胞に対する責任を持つ立場に至るのである。

『ユダヤ人の王』第6章において、蠅が雲のように激増し嵐のように舞い飛ぶ1941年、ロシアがついに参戦し、ヒトラーが苦戦を強いられているとき、ドイツでの農作業に必要なユダヤ人百名を、評議会の手で選択せよとの命令が下る。農場耕作に必要と言われたはずであるが、過去に病人や囚人たちが移送され、彼らの持ち物だけが回収されたという事実によって、ユダヤ人たちは真相を推察するのである。全体のために一部を犠牲にすべしという意見と、たとえ全体が減んでも同胞を一人たりとも引き渡すべきではないという意見とが対立し、喧々囂々の論争の末、全体を救うために一部の犠牲もやむなしという評議会議長の選択によって、移送する人々のリストを作成し、包囲している占領軍に渡すのである。結局、ユダヤ人評議会がゲットー住民の生死を決定する役割を担わされてゆく。

これは苦しい選択を余儀なくされた評議会メンバーの心理を描く緊迫した章である。ここに述べられるような迫真の議論が、方々のゲットーで交わされたことであろう。ナチスは、ユダヤ人たちの内部分裂や士気の低下を狙って、死に赴く人々をユダヤ人自らに選ばせようとしたのである。ここで

はフィリップ・ビューランの『ヒトラーとユダヤ人』にも指摘されるように、ドイツ軍の戦況が悪化するにしたがって、ヒトラーが最終的解決に走った経過が窺え、それはまた、ナチスが飢餓やチフスによる大量死では飽き足りず、絶滅収容所・ガス室への強制移送に踏み切った状況を物語る。

3 評議会議長の清濁併せ呑む性格

作品の主人公ハイム・トランペルマンは、医師、ユダヤ人評議会議長、そして「ゲットーの王」として君臨した。その清濁併せ呑む性格をゲットーで生き残った人物が回想形式で語り、読者の判断を仰ぐのである。

1918年頃、当時49歳のアイザック・ハイム・トランペルマンは、正統派ユダヤ人が世俗的と見なすリトアニアを出て、ポーランドのユダヤ人町にひょっこりと姿を現した。彼は、サムエル記に登場するサウル王のように、ほかのユダヤ人たちよりも背が高く、ライオンのような髪の毛を生やしている。リトアニア出身の「よそ者」であり、医師免許の取得もあいまいな状況でありながら、いかがわしい療法によって町で病院を繁栄させるが、やがて女性患者と問題を起こし、さらに保険金詐欺を働いていたことが発覚し、しばらく雲隠れする。数年後、町の孤児院で伝染病がはやった折に再び姿を現し、昼夜にわたる献身的な看護によって疫病を収束させ、また、少年時代に船でアメリカへ向かい、嵐によって難破し、丸太にすがって一人奇跡的に生き残ったという、自らの冒険談を語ることにによって孤児たちの心をつかむ。そして、保険金を少しずつ返済して共同体の信用を徐々に取り戻すのである。こうした懺悔の過程で彼は、危機的状況を自らのプラスに転化する術を心得ているようである。

トランペルマンは、孤児院を支援しているアメリカの慈善団体の代表が訪れた際、孤児たちの信望がいかに厚いかを巧みに演出し、代表のお声掛けで孤児院の責任者に出世し、さらに、町がドイツに占領され、ユダヤ人評議会が作られ、初期メンバーが占領軍によって辱めを受け虐殺されたあと、代わって評議会議長に任命されるのである。

彼の名前ハイムは、「生命」を意味しているが、彼が広めた冒険談、九死に一生を得た体験、猛火より同胞を救助したことなどによって、彼がゲットーの王として君臨する限り、住民は壊滅より免れるのではないかという噂が広まってゆく。彼の人気は、1940年夏にはまだ上々である。いずこからか見つけてきた白馬にまたがってゲットーを闊歩し、彼の肖像はゲットー内で通用する紙幣や切手やポスターにも印刷されている。彼のためにパレードも催され、ゲットー住民は、彼に近づくだけでも幸運であると思い、「王」とその「臣下」の間には特別な関係が存在しているように見える。若いときより放浪し、無数の危機を乗り越え、自分の運命が何かに委ねられ、自分は何かの目的を果たすために守られているような気持ちになる、というトランペルマンは、同胞を苦難より救い、約束の地へと導くモーセにもたとえられるのである。

いっぽう、トランペルマンの肖像を印刷した紙幣はゲットー以外では無価値であり、そのためにゲットー外部よりの密輸が減少し、それに伴うユダヤ人警察への賄賂が激減するが、その反面、ゲットーの通りには密輸の仕事を奪われた人々があふれ、飢えた人々に物資が届かなくなる。そうした

折、ゲッターに売春宿を設置しようとする占領軍の動きにトランペルマンは抵抗し、代わりに、音楽会や観劇を含む文化センターを設置しようとするのである。

ゲッターを占領軍の軍服製造工場に変え、人々に職を与え、存続を図ろうとしたのもトランペルマンである。ユダヤ人に課せられた労働のむなしさを知りつつも、可能なことを実行して存続を図ろうとするのである。

しかし、1941年になると、勤務中に使用する裁縫針、椅子、電気、労働そのものに対してまで、多くの不当税が課せられるようになり、そこで食うや食わずで昼夜交代勤務を課せられる労働者たちは不満を募らせ、5日間ストに突入する。それに対して、トランペルマンは、ゲッター内の政治活動や集会を禁じる側に回り、スト参加者が食料として求めた魚を大量に腐らせ、さらにスト参加者に発砲を命じ、大勢の犠牲者を出す。これらのことが本来は団結して共通の敵に立ち向かうべきユダヤ人同士の争いに発展してゆくのである。あくまで存続を図る目的でトランペルマンがとる処置が占領軍のそれと酷似してくるとは、なんという皮肉であろう。また、飢餓やチフスの犠牲者が増大している状況で、大量の魚を腐らせ、悪臭を放つ魚を大勢が昼夜兼行で埋めるとは、なんという無駄であろう。

こうした皮肉な状況の中で、議長トランペルマンは、労働によってゲッターの存続を図るべく、たとえ一部のユダヤ人が絶滅収容所に送られても、それによって全体が存続できるのであればやむなしという態度を貫く。それは当然ながら、ユダヤ人同胞に憎まれ、ゲッター内の抵抗組織によって命を狙われる結果に繋がってゆく。

そうした折、ゲッターの抵抗組織に属する14歳の少年が、森で目撃した絶滅収容所の惨状を報告し、それが抵抗組織によって印刷され配布されても、人々はそれを信じようとしなない。実際、彼らは信じたくないのである。やがて、ゲッターの劇場で孤児たちが演じるトランペルマンの風刺劇『マクベス』に不幸にさいなまれた人々は感動するが、観劇の最中、ユダヤ人警察が乱入し、トランペルマン夫人を含めて多くの名士を狩り立ててゆく。全体が助かるならば一部の犠牲はやむをえない、とマクベスのように身体を血にまみれさせ、同胞に憎まれつつ行動してきたトランペルマンであったが、ユダヤ人は例外なく消滅する運命にあるのだ、と初めて悟る。ワルシャワ・ゲッターでは多くの住民が連れ去られ、評議会議長チェルニアコフは毒を飲んだという。トランペルマンは、占領軍将校たちに強制移送に関して直談判をしている最中、発作を起こす。

1943年になると、労働可能なユダヤ人を残し、病人、老人、子供は、家畜用貨車で移送され、評議会の勢力は減少し、ユダヤ人警察や抵抗組織の台頭が目立ってくる。74歳になったトランペルマンは、妻を強制移送で奪われ、2度目の発作で身体半分の機能を失うが、やがて奇跡的に回復し、ユダヤ人警察署長や抵抗組織の指導者を狡猾に陥れようと図る。抵抗組織が深夜に武器を運搬するという情報をユダヤ人警察署長に伝え、同時に、警察署長が抵抗組織と共謀していると占領軍将校に密告するのである。その結果、占領軍司令官は警察署長に撃たれて死に、署長は逮捕され、抵抗組織の指導者は武器を奪って逃走するが、占領軍がゲッター破壊を予告した真夜中直前にやはり囚われてしまう。そこでトランペルマンは、ゲッターを救うという名目で二人を処刑してゆくのである。救助者と

処刑者の両面を持つトランペルマンは、果たして仲間を裏切ったのか、それともゲッターをできるだけ長く存続させようと腐心していたのか。

「ユダヤ人の王」はトランペルマンのみでなく、他のゲッターにも存在したようである。リングェルブルムの『ワルシャワ・ゲッター』には、ゲッターの支配者メリン「王」(26頁)が言及され、ワルシャワ・ゲッターのユダヤ人評議会議長アダム・チェルニアコフもユダヤ人の王と呼ばれている。さらに、1940年4月末にポーランド第一の工業都市ウッチに設立されたゲッターには70歳の老人で、異常に野心的で狂気に駆られたハイム・ルムコフスキという人物が存在した。通称「ハイム王」と呼ばれた彼は、ゲッターに400名の警官と3つの監獄を持ち、各省庁をそろえ、自らを神権によって油を注がれたものと見なしていた(38-39頁)という。崩壊に瀕したゲッターにおいて王として君臨したルムコフスキは、ソール・ベローの『サムラー氏の惑星』(230頁)やジェラルト・ライトリンガーの『最終的解決』(64、249、303頁)にも言及されるが、こうした王と呼ばれた人物たちを基にして、清濁併せ呑むトランペルマン像が形成されたのではないか。

極限状況に瀕したときにこそ、孤児たちを愛するコルチャックのような一面を備えながら、敵や味方を含めて狡猾に立ち回るトランペルマンのような清濁併せ呑む人物に、活動の舞台が与えられるのであろう。歴史を振り返れば、ホロコーストに直面したユダヤ人を救出したオスカー・シンドラーや杉原千畝を含めて、清濁併せ呑む人物が激動期に顕著な活動をしたことが思い出されよう。大きな歴史の流れの中で、トランペルマンのような人間が奮闘した意味は、光と闇の混交であった。

4 独特のユーモア

さて、トランペルマンのような人物を含めたこの世の地獄で暮らしながら、ゲッターの人々は緊張をほぐす彼らなりの方法を持っていた。ユーモアを考え出し、彼らなりに語り合ったのである。

たとえば、ゲッターのカフェでヒトラーの占領政策をネタにした冗談が述べられ、以下のようなユーモアが飛び交う。

「ヒトラーと太陽の違いとは何ぞや。太陽は西に沈むが、ヒトラーは(ロシアで敗北し)東に沈む」(176頁)。

「ホロヴィッツ(ヒトラー)がこの世を去る日は、いつでもユダヤ人にとっては祝祭日となる」(128頁)。

また、滑稽な状況より生じるユーモアも見出せよう。

ロシアの革命思想に影響を受けたゲッターの孤児たちは、秘密の出産所で生を受けた幼児たちを養うために、トランペルマン所有の牝牛を葬儀車に隠して盗もうとするが、未亡人の赤いハンカチを見て興奮した牝牛は、新しく掘られた墓穴に落ちてしまう。さらにその後、牝牛を棺おけに入れて護衛のそばを通過しようとするとき、風邪を引いた牝牛が大きなくしゃみをする。

いっぽう、ゲッターの住民たちを恐れさせた強力な占領軍の司令官は、トランペルマンの狡猾な罠にはまり、ユダヤ人警察所長の放った一発の流れ弾に当たって、撃たれたことを意識する間もなく、あっけなく倒れてしまう。

次に、リングェルブルムの『ワルシャワ・ゲッター』にも以下のようなユーモアが見出せる。

「近頃のナフレキ街はまるでハリウッドだ。いたるところでスター[ユダヤ人の腕章の星]に会える」(18頁)。

「飛行機のガソリン代を節約しよう、ヒトラーはベルリンを、チャーチルはロンドンを爆撃しよう、という提案がなされた」(54頁)。

また、ワルシャワ・ゲッターにおいて評議会議長を務めたチェルニアコフが残した日記にもユーモアを見出せよう。ナチスに抵抗する地下組織の批判を受けながら、ゲッター内の経済活動、食糧供給、教育活動などの維持に努めた彼の日記は、1939年9月6日から42年7月23日まで規則的につづられ、個人的な詳細や歴史的な状況評価を含み、当時を知る貴重な記録である。

およそ50万のユダヤ人が狭いゲッターに押し込められ、超過密、飢餓、伝染病の蔓延などによって戦争終結時までにその99%が亡くなったという。この極限状況の中で、「日々の仕事をするのだ。泣き言を言っても始まらない」(22頁)と、チェルニアコフは週7日働き尽くめであり、「神は8日目に安息日をくださらないものか」(126頁)とふと漏らす。正統派ユダヤ人が神の象徴とみなすあごひげがドイツ兵によって強制的にそられたことを「愉快的遊び」(84頁)と皮肉り、シナゴークが焼かれても、「それは神に心配していただく」(105頁)とその衝撃をかわし、強制的につけさせられた黄色い星の腕章によって「元帥」と誤解された逸話(115頁)を盛り込むなど、死に塗りこめられた環境で極力ユーモアを用いている。しかし、死の選別を任された評議会議長の苦悩は深く、最後は強制移送への協力を拒み、1942年7月23日、自らの命を絶つ。

強制収容所の地獄を潜り抜けたホロコースト生存者より生まれたスティーヴ・リップマンは、ヒトラーの犠牲者たちが心の武器として用いたユーモアを収集し、20年以上にわたるその研究成果を『地獄での笑い』にまとめているが、上記のユーモアもその中に含まれるのである。

5 若者を中心とした抵抗組織

『ユダヤ人の王』には、年老いてゆく狡猾なトランペルマンと、ゲッターでナチへの抵抗組織に加わってゆく若者たちが対照的に描かれている。

平和を愛し、武器の使用法も知らず、分散して暮らしていたユダヤ人は、初期において指導者となるべき同胞を殺され、最新装備で武装した圧倒的に優勢なドイツ軍に直面することになった。最初から武器もなく、疲弊し、老人、子供、病人、女性を抱えたユダヤ人たちは抵抗を組織する余裕すらなかった。その上、犠牲者を安心させ欺くナチスの行為と、ナチスが繰り出す「連帯責任」とがユダヤ人の抵抗力を弱めた。一人が抵抗すると、それが全体の責任となって跳ね返ってきたのである。さらに、生命の危険を冒してゲッターを脱出し、パルチザン(ゲリラ部隊)の住む山間部までたどり着くことはきわめて困難であった。しかも、パルチザンの中には反ユダヤ主義者も含まれていた。

圧倒的な勝者に対しての抵抗は不可能ではあっても、ドイツ軍がスターリングラードで敗れてからは、パルチザンの組織化やゲッターでの反乱が起こっていた。どうせ死ぬのなら、誇りをもって死の

う。抵抗しよう。敵に高い代価を払わせるのだ。残されたユダヤ人たちは、強制移送に抵抗し、虫けらのごとく殺されるよりは、人間としての尊厳を守って死のうと決意したのである。特に、若者の間にはまだ柔軟性や戦う気力が残っていたためか、抵抗組織のメンバーには驚くほど若いメンバーを見出すことができる。たとえば、「ミワ・ザメンホフ地区を守る戦闘隊のリーダーは、19 歳になるダビッドであった」（『壁の両側』256 頁）。若者たちは、厳しい環境において精神的にも驚くほど成熟していたのである。彼らは抵抗の象徴となってゆく。

ちなみに、逆境における若者たちの精神的な成熟を示すホロコースト文学作品は、枚挙に暇がない。イェジー・コジンスキーの『ペンキを塗られた鳥』において迷信深いポーランドの人々によってさまざまな虐待を受けた主人公の少年は、「雪の中に穴を掘って越冬する」ことも含め、存続の術に長けた人間へと変わってゆく。アイザック・バシェエヴィス・シンガーの『愛の迷路』において、「収容所の子供たちは、一夜にして大人になった」。そして、エリ・ヴィーゼルの『忘却』において、ゲットーに祖父母の安否を尋ねて忍び込む 15 歳の少年は、「76 歳の人間」よりも多くの体験を積むことになるのである。

また、『十字広場のタバコ売り』において、1942 年、ワルシャワ・ゲットーより辛うじて脱出し、ゲットー崩壊後ドイツに占領された市内で、最初は乞食をし、街角で歌を歌い、雑用を引き受け、やがてタバコを売ってたくましく生き抜く少年たちが存在した。彼らのやりくり上手には感銘を覚えざるを得ない。後に彼らはイスラエルに移住し、中東戦争で戦うのである。

新渡戸稲造の『武士道』には、切腹を命じられた 24 歳と 17 歳の若者がまだ 8 歳の弟に切腹の手本を示し、幼い弟も兄たちに習って死んでゆくという状況が記述されてある（120 - 22 頁）が、洋の東西を問わず、環境が変われば、若者も大人顔負けの行動を示すのであろう。

『ユダヤ人の王』において、ロシアの革命思想を奉じる地下抵抗組織の若き指導者アインホーン、労働者たちを抵抗へと駆り立てる分厚い眼鏡をしたキプニス、アメリカ製のカメラで記録写真を撮り後世への伝達を図る孤児クリスタルとリフシツ、ゲットーで秘密の出産所を運営する若い医師ザム、人間爆弾を作る化学者ジクマント、アメリカのユダヤ組織より軍資金を届けに来て、抵抗組織に残るフォールハバー、苦難の果てに絶滅収容所のありかを突き止める孤児リビザニーなど、若者たちは飢餓と絶望の中より立ち上がるのである。そこでは、身体の小さな子供たちが生命の危険を冒して、壁の割れ目より忍び出てポーランド人より武器や食料を購入し、それをゲットーへと運んだ。

こうしてゲットーの極限状況においてさえ、人々は懸命に生きる努力をし、少数の人々は圧倒的な敵に対して抵抗に立ち上がりさえした。こうした歴史を知るときに、現代のわれわれはせめて自らの仕事にいそしみ、自らの領域において最善を尽くす生き方を追求してゆきたいと願う。

6 戦うユダヤ人のイメージ

ユダヤ人警察署長と抵抗組織の指導者二人が処刑されて一年後の 1944 年、地下にもぐった抵抗組織は、押し寄せるロシア軍やパルチザンと手を結び、ドイツ軍の橋爆破を阻止する作戦に参加するよう求められるが、飢えた身体では無理であるとそれを断る。パラシュートでゲットーに着陸したワル

シャワ・ゲッター出身のユダヤ人でロシア軍人のタラダシュ（チェルニアコフの息子）は、歴史の幅広い観点によってトランペルマンの行った行動を評価する。誤解を伴う歴史の皮肉を悟った抵抗組織のメンバーは、結局、食料や武器を空輸してもらい、作戦参加を決定する。二隻のボートに乗った40名のユダヤ人兵士も作戦に合流する。そして、ゲッターの人間によって始めてドイツ軍兵士が倒されるのである。タラダシュは多くの弾丸を受けて戦死し、ボートのユダヤ人兵士たちも全滅し、トランペルマンも死んだが、作戦は予想以上に成功し、橋を守ることができた。ところが、予期されたロシア軍の前進が見られない。橋の安全をロシア軍に知らせようと飛び出したザム医師は砲弾で倒れる。その後、ドイツ軍の反撃が開始され、3人を残して抵抗組織は壊滅する。ゲッターは火の海となり、住民は一人残らず移送されてゆく。しかし、そこへ死んだと思われていたトランペルマンが再び姿を現わし、収容所への移送過程において、幾多の危険を潜り抜けてきた自らの物語を語ることによって、コルチャックのように孤児たちを励ますのである。

ゲッターで生まれた戦うユダヤ人のイメージは何をもたらし、その後いかに発展しているのか。以下のようなホロコーストの文学作品に、そのイメージは顕著に現れているのではないか。ユダヤ人兵士ノアが軍隊内の反ユダヤ主義と戦い、戦功を挙げてゆく『若き獅子たち』（1949年）、イスラエル建国に至る戦いの紆余曲折を辿る『栄光への脱出』（1958年）、不正な権力に抵抗する見本を示し、政治的な意識に目覚める『修理屋』（1966年）、ユダヤ人の肉体的・精神的な強靱さを印象付ける『サムラー氏の惑星』（1970年）、ゲッターやバルチザンにおける戦いを描く『忘却』（1992年）、など枚挙に暇がない。

さらに、危機的状況においてユダヤ人を救済するために作られた人造人間ゴーレムの伝説も絡めて、それをイスラエルの将来に結び付けてゆく動きも見られよう。

ゴーレムは語ることができず不完全ながら、驚くべき生命力に満ちている。そこで、勢力を蓄え、危険に満ち抑制を欠く可能性のあるイスラエルがゴーレムにたとえられる場合も出てこよう。ユダヤ系アメリカ人の中でイスラエル支持グループと批判グループが存在し、批判をタブー視する動きもある中で、現代アメリカのユダヤ系作家（たとえば、マイケル・シェイボン、セイン・ローゼンバウム、ステイーヴ・スターンなど）の作品にゴーレムが頻繁に描かれるようになる。ユダヤ人の意識に伝統的に存在するゴーレムの隠喩を用いて、イスラエル防衛の必要と正義の問題を語ることも可能であろう。

今後、戦うユダヤ人のイメージがいかなる軌跡をたどるか、関心をそそる課題であると言えよう。

結論

戦争が終わり、アウシュヴィッツから辛うじて生還した孤児の少年二人（全盲になったキピニスと、心臓が肥大したリピザニー）は、トランペルマンの生死を確認する旅に出て、リヴァプールを启航する蒸気船に乗り、最後にアメリカに向かう。アメリカのユダヤ組織から来てゲッターの慰霊祭に参加した人物が、キピニスとリピザニーにアメリカ行きの切符を渡すのである。ちなみに、慰霊祭でユダヤ人への言及はまったくない。トランペルマンの生死に関してはさまざまな憶測が飛び交う。

ゲッソーの極限状況で奮闘した人々より現代のわれわれは何を学べるか。確かに、ゲッソー内を工場群に変貌させ、人々を職業につかせ、ゲッソーの存続を図ることには意味がある。その仕事は占領軍を利用しただけであったことは大きな皮肉であるが、ただし、このような組織力を平常時において活用したらどうであろうか、と考えるとき、この歴史は意味を増してこよう。

参考文献

- 近藤二郎. 『コルチャック先生』. 朝日新聞社、1990.
- ハーメルン、グルッケル、林 瑞江訳. 『ゲッソーに生きて——あるユダヤ婦人の手記』. 新樹社、1974.
- ビューラン、フィリップ. 『ヒトラーとユダヤ人』. 佐川和茂・愛子訳. 三交社、1996.
- ミード、ブラドカ. 滝川義人訳. 『壁の両側 ワルシャワ・ゲッソー 1942～1945』. グリーンピース出版会、1992.
- リングェルブルム、エマヌエル. 大島かおり、入谷敏男訳. 『ワルシャワ・ゲッソー 捕囚 1940—42 のノート』. みすず書房、1982.
- ワース、ルイス. 今野敏彦訳. 『ゲッソー ユダヤ人と疎外社会』. マルジュ社、1981.
- Bellow, Saul. *Mr. Sammler's Planet*. New York: The Viking Press, 1970.
- Burrin, Philippe. *Hitler and the Jews*. London: Edward Arnold, 1994.
- Chabon, Michael. *The Amazing Adventures of Kavalier & Clay*. New York: Picador, 2000.
- Epstein, Leslie. *King of the Jews*. New York: Coward, McCann & Geoghegan, Inc., 1979.
- Guttman, Israel. ed. *Encyclopedia of the Holocaust*. New York: Macmillan Publishing Company, 1990.
- Hersey, John. *Hiroshima*. New York: The Modern Library, 1946.
- . *The Wall*. New York: Alfred A. Knopf, 1950.
- Hilberg, Paul. et.al. eds. *The Warsaw Diary of Adam Czerniakow*. New York: Stein and Day, 1979.
- Ish-Kishor, S. *A Boy of Old Prague*. London: Chatto and Windus, 1963.
- Keneally, Thomas. *Schindler's List*. New York: Simon & Schuster, 1982.
- Kosinski, Jersey. *The Painted Bird*. New York: The Modern Library, 1965.
- Levine, Hillel. *In Search of Sugihara*. New York: The Free Press, 1996.
- Lipman, Steve. *Laughter in Hell—The Use of Humor during the Holocaust*. New Jersey: Jason Aronson, 1991.
- Malamud, Bernard. *The Fixer*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1966.
- Morris, Nicola. *The Golem in Jewish American Literature*. New York: Peter Lang, 2007.
- Nitobe Inazo. *Bushido: The Soul of Japan*. Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1969.
- Reitlinger, Gerald. *The Final Solution*. London: Jason Aronson, 1987.
- Rosenbaum, Thane. *The Golems of Gotham*. New York: HarperCollins Publishers, 2002.
- Shabbetai, K. *As Sheep to the Slaughter? The Myth of Cowardice*. New York & Tel Aviv: World Association of the Bergen-Belsen Survivors Associations, 1963.
- Shaw, Irwin. *The Young Lions*. London: Pan Books, 1949.
- Singer, Isaac Bashevis. *Enemies, A Love Story*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1972.
- Stern, Steve. *Lazar Malkin Enters Heaven*. London: Abacus, 1987.
- Uris, Leon. *Exodus*. New York: A Bantam Book, 1958.
- Wiesel, Elie. *The Forgotten*. New York: Schocken Books, 1992.
- Ziemian, Joseph. *The Cigarette Sellers of Three Crosses Square*. Minneapolis: Lerner Publications Company, 1975.
- Zylberberg, Michael. *A Warsaw Diary 1939-1945*. London: Vallentine, Mitchell, 1969.